

Die gejagte Jgerin

プレゼンス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは王女の物語で、彼女の友人、そして彼らが救うべき世界。食糧のための狂った愛のティーンエージャーの物語。オッズにもかかわらず忠実なままだった2人の司令官の話。別の世界から来た3人の女の子の話。

これはシールダー 分隊の話です、と 狩猟されたとなった狩人。

目次

3	K a p i t e l 1	プ ロ ロ グ	1
15	2 K a p i t e l 1		9

中尉真木 ミカド、少尉南 マミ、と 少尉 森 マリー 食べるチームのための商品を購入する市場に行きました。

カイ皇帝とキリクリキキ天皇が暗殺されてから275日が反逆者の手に渡っていた。シールダー 分隊のメンバーは、自分の身を隠すために、自分自身を人とブレンドして全国を旅していた。プリンセスがまだ生きていたことは誰も知りませんでした。

城やその他の宮殿で保持されている秘密は、彼らは魔法のように守られていたし、シールダー 分隊は彼らがどこに行っても彼らと一緒に運ばれた。

プリンセス・キクは、瞑想を終え、床から立ち上がり立ち上がった後、彼女の動物的な力を使って彼女の持ち物をつかみ、ドアを開けて同じように閉じた。彼女は下宿屋で宿屋に挨拶した。

「おはよう」彼女は出口に向かって走ったように彼女は言った。

宿屋さんは「おはよう」と答えました。

書店では、海軍の船長と大將は長い間禁止されていた本の2つの例を見つけましたが、それらが現存する唯一のコピーであったので、彼らはそれらを購入することに決めました。

彼らは食べ物や本を買った後、彼らは旅館に戻った。

「すみません！ すみません！」宮殿の門まで走っているうちにプリンセスは言った。

彼女が最終的に到着したとき、彼女は「狩猟 名人」としてしか知られていなかった個人と会った。

政府を引き継いだ超国家主義者たちに迷惑をかけるために時折しか現れない人。ハントーは、メツセージがあることを示す信号を出しました。王女は信号を出し、ハンターは彼女に小さな紙を与えてから消えた。王女キクは彼女の服の中に紙を詰め、要塞に戻った。

「あなたはありません」と艦長カタリナは言った王女スに。

王女は微笑んで彼女のチームに加わった。

彼らの部屋に戻って、彼女は何が起こったのかを彼らに話しました。

「メツセージがあります」

「誰からですか？」 提督は尋ねた

「私はまだ知らない、まだそれを読んでいない。しかしメツセンジャーは。あなた
は誰が知っていた」

「興味深い」海軍キャプテンは言った。

他の女の子たちはちょうどそれらを見て、次にお互いに食べ物を用意し続けた。

王女キクは手紙を開いて微笑んだ。それはシルダー 分隊に情報を提供し、彼らが知っていただけの秘密を守るために城に残っていた彼女の親友猟師 イテ からの

メッセージだった。

「お前さん！」

あなたが全て残って以来、物事は悲しくて寂しかったです。

この人たちは本当にばかげた雌犬です。彼らは思考せずに行動し、そして彼らの間違いのためにお互いを責めるので、脳を持っていないようです。

これまで新しいことは何も起こっていませんが、私は彼らが魔法のユーザーを抱える要塞である彼らに反対する町を包囲することを計画していると思います。

禁じられた本の最後のコピー、グリモアが見つかりました。私はそれを三度読んで内容を記憶させた後、私はそれを破壊しました。それ以外には私には分かりません。

あなたに会えなくてとても寂しい。あなたは私の親友です、そしてそれよりも多分。誰が知っている。私がそれらを見逃している女の子にも教えてください。

愛を込めて、

イテ

小文字を読んだ後、王女は涙を流しました。女の子は誰から気づき、手紙であり、微笑んだ。

「これ以外の魔法のユーザーが多い城壁のある街はどこにあるの？」と王女に尋ねた。

「なぜあなたは尋ねるのですか？」提督に尋ねた

「將軍はそれらの1つを攻撃するかもしれない。」

「もう2つの都市」とキャプテンは言った。「Sneygscield、西の山脈にある都市、と W・dr✕scylld、東にある港町。南に4番目の都市があった、P・rkussseht、都市は破壊され、生存者は他の3都市に逃げた」

「だから、どこに行かなければならないの？」とキクは尋ねた。

「W・dr✕scylld、それは港町であり。それは、私が国を征服しようとした場合、私が攻撃する都市だ」提督は言った。

「∴. そして、Sneygscieldは山に位置しているので、そこに着くのが難しくなります。あなたがその都市を包囲したいなら、あなたは資源を使う必要があります

」海軍大尉カタリナを追加

「まあ、私たちはW・dr✕scylldに行くつもりです。15分で準備する」キクは言った

その後、チームは準備を進め、そこには存在しなかった技術で、世界の外に装備を着ています。

約6ヶ月の間、シールドー 分隊のメンバーは、他の世界に行き、ミストランドの連合王国の軍隊によって訓練されました（ミカ、マミ、マリーの故郷）。そこ、彼らは今使用していた装置を受け取りました。

彼らの鎧の上に服を着て、彼らはMehghd・nの街を歩いて出ました。

「歩いて10日かかるだろう」スワンヒルドは言った、「しかし、ここには約1日歩いている竜の巣があります」

「待って、ドラゴンに乗ると言ってるの？」マミに尋ねた。

「ちよつとした提案」がスワンヒルドに答えた。

「それは楽しいよ、私は思う」とミカは言った。

「私はいつも1つ乗りたかった」マリー追加。

「そして、我々は龍の巣穴に行くだろう」と冗談のトーンでカタリナ言った。

グループが歩いている間、キク王女は、イテとの関係、彼らが一緒に過ごした瞬間、彼らの冒険、そして戦争がどのように分かれていたかを考えていました。

※※※

歩く1日の後、グループはついに竜の巣窟の近くに到着した。訓練を受けたライダーズ、スワンヒルドは龍の洞窟に近づいた。大きな、大きな龍があった、それはアドミラルを感知した後、彼の目を開いた。彼女の魔法を使用している提督は、ドラゴンを飼いならし、彼女の命令に降伏した。グループの残りの部分はその後、彼女によって通知された後に近づいた。

W・d r s c y l dへの旅は、歩くと10日間ではなく、ドラゴンに乗って12時

間しかかからなかった。

ドラゴンが町の近くに来たとき、チームはドラゴンから飛び降りて目撃されずに着陸し。ドラゴンは彼の隠れ家に戻った。

女の子たちは街に入り、商人の一人が見つけた時を歩いていた旅行者の服を着た。

「新しい服がほしいですか？ 私はあなたが必要とするものを持っている」商人は言った

「私たちに食べる場所を提案して夜を過ごすことができれば、感謝するだろう」スワンヒルド言った

商人は町の中心にある旅館の1つにそれらを導いた。

「そこにそれがある」と彼は言った

「おかげで」カタリナは金貨を与えながら言った

「商人は硬貨を見て、その中の王立シールを見て、「これは王冠です、どこで手に入れましたか？」

私はコインを収集するのが好き、私の両親は旅行者でした、彼らは訪問した場所の文化を研究するのが好きでした、そして、私が生まれたとき、私はコインを集めて「カタリナ言った、「あなたはコインをしたいのですか？ 私はそれをより良く使うかもしれないから」

「さて、私は硬貨を保つだろう」と商人は言つて、去つた。

「あなたが言つたことは本当ですか？」スワンヒルドに尋ねた

「はいといいえ、私の両親について旅行者である部分は、それは本当です。もう一つはコインコレクション、私それはそれを作つた」カタリナ答えた

「私たちには部屋がある」マリーは言つた

「一番上の部屋です」マミ追加

「最も高価な部屋？」スワンヒルドとカタリナ一同に尋ねた

「それはそれを見守るのに完璧な場所にして、街の四隅すべてのビューを持っています。」

「私はそれがやるだろうと思う」キク言つた。

Kapitel 1

SEDDHEWZ (王都)

中央アースデイス

イテは中央の広場に座って食事を待っていた。

イテ、自称ロイヤル・オフィシャル・エイト・オフィサー、プリンセス・ベスト・フレンド、は王宮を見守って首都に留まっていた。重要な書類の奪取を防ぐため、城は魔法のように封印されていた。王国や大陸だけでなく世界全体を脅かす可能性のある文書。

「Guten Appetit!」ウエイトレスは食べ物を配達しながらイテに言いました。

「Vielen Dank」

食べている間、イテは姫との冒険と誤解を熟考し始めた。彼らがしたすべての愚かで狂ったことは、彼らと前のキリクリキ天皇とカイ皇帝だけが知っていた彼らの秘密結婚を含めて。

「今日私は何をしますか?」熟考されたイテ、その後、少し休憩して言った「知ってい

る！たくさんのお楽しみ！」

イテはその後、飲食店を出て、狂った人のように笑っている間に中央公園に向かつて走った。近くを通過した人は、「この人は何を持っているの？」

ティーンは公園に着いて、草の中に横たわった。イテはその後、キュウリを取り出し、歌いながらそれを食べ始めた。「食べ物最高です、空腹は最悪です！私たちは周りにパーティーをしながら、すべて平和に住みましょう！」

数時間後、イテは城の近くの約50メートルに位置する隠れ家に戻りました。

※※※

W・D R X S C Y L D

東アースデイス

港町での生活は静かでした。あたかも何も起こっていないかのように、誰もが正常に生活していました。しかし、現実とは別のものでした。軍隊は近くの町に集まっています、依然として王冠に忠実な最後の立っている都市の一つを包囲する準備ができていた。

チームはそれを知っていたので、彼らはそこにいたのです。

「私はこれが好きではない、これはまったく好きではない」とキクは言いました

「私は知っている、あなたはしない、私はどちらかが好きではない」彼女を抱きしめながらカタリナ言った

「なぜあなたの軍隊は来ませんか？」キクはミカ、マリ、マミに尋ねた

「彼らは命令を受けた。私を知っている限り、彼らは私たちの軍隊が首都を取り戻す準備ができているときに来るでしょう」ミカ答えた

キクは一時停止し、そよぐ、その後微笑んだ。「行きましょう」彼女は言いました

※※※

女王の命令によって、忠誠勢力、海兵隊員、シャドウガードは、特殊な活動や保護的なサービスからスパイの役割に切り替えました。Meghdan、Wdrskyld、Sneygscieldの3つの忠実な都市に2600人の運営者が送られた。彼らはまた、首都Seddhewhにも送られました。彼らの拠点はPrkusshehtの遺跡にあり、ホームレスの人の偽装の下で活動しています。

海軍歩兵は、高度に機密性の高い操作、主に偵察と情報収集を担当する特別な操作部隊でした。

彼らは陸軍のBelagerungskommandos（攻城コマンドー）よりもはるかに優れた装備と訓練を受けていた、襲撃や直接行動などの操作を行う軽歩兵ユニット

ト。

シャドーライフガードズは、サイズは小さいものの、訓練と装備の両方のユニットを上回っていました。主に、ロイヤル・ハウスへの保護を提供することを任命されたエリート・スペシャル・オペレーションユニットとしての地位に起因する。

そのメンバーは、主に海軍歩兵と攻城コマンドーから軍の両枝から手に取られました。

※※※

TERHZEHEE T

東アースデイス

元帥 サー・アレクシス・コルベ・シュトウトマン、軍隊の指揮官、王冠を裏切った人、暴行のために彼の軍隊を準備した。

「夕方に移動する準備をする、夜に攻撃する」マーシャルはBelagerungskommandosの指揮官である ジ・ハティム 大佐に命じた。

「今日、私たちはこの街を捉え、生き残る能力を取り除きます。ハラー！」元帥を叫んだ
「ハラー！」 軍隊は叫んだ。 「ハラー！ハラー！ハラー！」

※※※

W・DRΞSCYLD

東アースデイス

それはほとんど夕暮れだったし、女の子はすでに彼らの場所を取っていた。

ミカは要塞の外にある破壊された塔に隠れていた。彼女はギリースーツを着ていて、特別に設計された狙撃ライフルで武装していた。

彼女のスナイパーライフル、TM-ASSPS Mk 1（テクノマジック高度なスナイパーサポート精密システム）、は時代の銃器よりもはるかに進歩していて、彼女は今だった。チームの他のメンバーの機器についても同じことが言えます。

夕日が到着すると、街の門が閉ざされ始めた。彼らが閉鎖されている間、軍によって秘密裏に送られた代理人が市内に浸透させるた。不運なことに、彼は頭にきれいなショットで彼を削除マリーによって発見されていた。

マリーは彼女の通信装置を通して言った「それは始まっている」

そして彼女は正しい、そして彼女は正しかった、太陽が沈むとすぐに、攻城コマンドーは都市に向かって前進し始めた。彼らが約1500メートルになると、彼らは止まった。

ミカはそれが何かを計画していたことを知っていた：砲撃。

彼らは大砲で壁を破壊しようと思いました。しかし、彼女はそれが起こるようになるつもりはなかった。

彼女は火薬を携えている兵士が大砲の近くに行くのを静かに待った。彼がパツケージの1つをお届けしようとしていたとき、彼女は彼を撃つ、彼は火薬を落とした。数ミリ秒後、彼女はトーチを運んでいる兵士を殺した。火薬を運ぶ破損したレシピアントの上にトーチを落とす。

火がそれに触れるとすぐに大きな爆発が起こった。

軍は驚きの要素を失っていた。

ミカと他の少女たちが攻撃軍の指揮官を一つずつ殺した。

1000人の死傷者軍隊は苦しんだ。

翌日の門はいつものように開いていなかった。攻撃のニュースが街の指導者たちに伝わった、そして他の忠実な都市に。

ジ大佐は、軍隊を使用してはならない方法で軍隊を使った元帥に怒っていた。だから、混乱の中で、彼は残りのコマンドゥに近づき、彼らに退却を命じた。

K a p i t e l 2 | K a p i t e l 3

SEDDHEWZ (王都)

中央アースデイス

イテは隠れ家で魔法を練習していたが、魔法の戦士、バトルメイジ、力の魔術師のよ
うに、イテはスキルを向上させる必要がありました。がプリンセスを助けようとしてい
たら。

王女キクは、陰（浸潤者）、発明者（エンジニア）、テンペスト（錬金術師）だった。
カタリナ、斥候レンジャーズ（射手浸潤者）、およびパラディン（宮殿戦士／コンバッ
トヒーラー）が含まれる。

スワンヒルド、秘密レンジャー（魔法射手）、グレイブライダー。

ミカは特殊部隊の医療責任者であり、別の世界の戦闘医。マミとマリー はどちらも
戦闘救助隊員であり、彼らは同じ世界の看護師だった

魔法の戦士は戦闘で攻撃的な魔法を使うように訓練された魔術師でした。バトルメ
イジは戦闘で守備魔法を使用しました。力の魔術師は戦闘中に運動論的能力を使用し
ていました。

陰は特殊な浸潤者で、目に見えないように魔法を使うことができず。発明者は技術を魔法と混合して戦闘に使用したエンジニアでした。テンペストは戦闘中に錬金術と魔法を組み合わせた錬金術師でした。

斥候レンジャーズ / 射手浸潤者、長距離とステルス戦闘に特化しています。パラデインは装甲 宮殿戦士 / 戦闘ヒーラー。

秘密レンジャーは魔法を使うことができる魔法射手でした。しばしば射撃技能と魔法を組み合わせました。グレイブライダーは戦闘中にグレイブや他のポールアームを二重に使うことのできるライダーでした。

イテが練習したとき、隠れ家には謎の人物、猫娘 が登場しました。

「そこあなたは、 獵師 イテ」

イテは練習をやめ、戻った。そうだったのは ニア・コマタ、元素剣騎士修道会の指揮官、コードネーム「Misha」のもとで運営されていたオムニバースのガーディアン の一人。彼女は同じ世界から来たイテ、そして女の子は出身でした。

「私はあなたを戻すためにここにいるのではなく、まだ」

「なぜここにいるの？」

「それは分類されている...。ただ冗談、私はここに食べに来た。」

「たべる？」

「うん、私は私のチームの他のメンバーとここに来た最後の時間、私たちは中央広場で食べに停止しました。覚えているように、私たちはいくつかの状況のために仕上げる事ができませんでした。」

「あなたを信じるべきですか？」

「それはあなた次第です。．．．とにかく。．．．来たい？私は支払っている。私たちは食べた後、忠実な軍隊に物資を届けています。」

「私たち？あなたは私を引きずっていますか？」

「そうです。そして、いいえ、あなたではありません。我々は知っているあなたは退屈な何かが好きではない、あなたはいつも楽しく過ごしたいと思っています。」

「あなたが私にデザートをいくつか手に入れたら、私は行くだろう」

「あなたの健康を守ることを約束した場合にのみ」

「はいはい」

イテが言ったようにすぐに、ニアは両者を広場にテレポートした。どこで 愛 百合、コードネーム「アーキテクト」が待っていました。

※※※

南東アースデイスのどこかで

シールダー 分隊は夜明けの間にW・d r □ s c y l d市を出発した。彼らは誰も

が彼らが都市を守るための責任ある人であることを知らせることができませんでした。要塞を守るために市民（およびそこに秘密に配置された軍隊）の責任が今であった。

シールドアーク分隊 a. k. a. ピーチレンジャーは、現在、Sneygscieldの街へのルートを旅していましたが、しかし、彼らは中央に位置する首都を通ることを避けたかった。そこで、彼らは南に道を辿ることにしました、P・rkusseshの遺跡を訪れる機会を利用する。

「私たちが受け取ったトレニングがすべて報われたと思います」とカタリナは冗談を言った

「うん、」スワンヒルドは同意した「厳しいトレニングの6ヶ月」

「ユニットはどのように呼ばれたのですか？」尋ねられたカタリナ

「私はなぜそれが私だったのだろうか、他にはない」キクは言った

「元素剣騎士修道会、元素剣騎士団、元素剣団。」マリーは答えた「なぜ私たちが選ばれたのですか？知りません、彼らだけが知っている。」

「私がそこに住んでいたとき、私はいつか私が募集され、それらによって訓練されるとは思っていませんでした。彼らは私たちの世界で最もハードコアで、最高の訓練を受けた最高のユニットです。1 / 218750000の入受入れ率で」マミは追加

「機会はいろいろな形で現れますが、時々予期しない」ミカは言った「彼らは浪費す

べきではないプレゼントです」

※※※

P・R K U S S E H Tの遺跡

南アースデイス

翌日、キクとチームは、P・r k u s s e h tの遺跡に到着しました。忠誠勢力の部隊が彼らの拠点を設立した場所。ホームレスとして偽装され、忠実な軍隊は王国を通じて情報ネットワークを運営していた。

また、遺跡からそれほど離れていないが、B e l a g e r u n g s k o m m a n d o sは彼らの本部を持っていた、忠実主義者が知っていた何か。

チームはロイヤルテイストのリーダーである 海軍大将 タジャナ・ラスカと朝食を食べていました、「M i s h a」と「A d m i n i s t r a t o r」が到着し、商人として偽装されたとき。

「いくつかの消耗品が欲しいですか？」ニアは彼らに尋ねた、彼女が近づくにつれて「私たちはこれ売ることができませんでした。私はそれらを投げ捨てるという考えが嫌いです」

チームと 海軍大将が近づいた

「はい、ありがとう」とキクは言った

「私はあなたのために何かを持っている」ニアはチームに語った。他の忠誠主義者たちは、百合の助けを借りて物資を世話した。

「はい？」 ミカが尋ねた

「あなたは現在の武器が気に入らないのは分かっていますが、それは正しいのですか？」

ニアが尋ねた

「はい」彼らはうなずいた

「それらを戻ってきて、私はあなたにもっと良いものを与えてくれるだろう」

彼らは最初は躊躇していたが、彼らは彼女にライフルを渡した。ニアはそれからそれぞれにスタツフを派遣した

「これは何ですか？」 カタリナが尋ねた

「じょうだんですか？」 スワンヒルドが尋ねた

「いいえ、これは私のチームだけが使用できる武器システムです。SG TMCQC
CAW、テクノマジック近接戦闘戦闘コンパクト高度兵器システム。Schatten
gardeだけが使用する武器。どんな武器にでも変換できます。：盾から大砲まで、
剣からボールスターまで、何でも」

「二ース」ミカは言った

「もし私があなただったら、私はそれをしないだろう」ニアは新しい武器を試そうとして

いたスワンヒルドに言った。「彼らが見ています」

「あなたが正しい」

ニアは百合にカートに戻るようにと告げた

「行く時間です」 ニアは言った

「はい」と答えた百合

「さようなら、何もかもありがとう」チームが一斉に言った

そして、ニアと百合はP・rkussehtの遺跡を出発しました。チームはそこにとどまった。

※※※

数分後、彼らは遺跡に到着してから彼らに従っていたBelagerungskommandosのパトロールによって止められた

「あなたは誰？」 兵士の一人が尋ねた

「商人」ニアは言った

「あなたの商品を見せてください」

「勿論です」

百合は兵士をカートの後ろに導き、果物、穀物、野菜、食物などの持ち物を彼らに示

した。

彼らがカートを調べると、兵士の一人が盾を見つけました。彼がそれを見て、彼は弓と石弓を見つけた。

「あなたは商人だと言った。それでは、なぜあなたは武器を持っていきますか？」 パトロールのリーダーに尋ねた

「自己防衛のために。我々、商人はしばしば危険な道を進む」

「鎧を装備？ 兵士だけが使う鎧？」

「さて、私はあなたに真実を伝えるつもりです。私たちは昔は兵士だった、私たちの軍隊は破壊された。私たちは唯一の生存者でした。軍隊はもはや存在せず、私たちに支払う人はいませんでした。私たちは戦場にあつた消耗品を販売することに決めました。私たちも武器を破壊したので、誰もそれを使うことはできませんでした」

「この記章、以前は見たことがない。どこから来たの？」

「世界がどこから終わり、どこが冷たく、どこが凍結するのか」

「銀貨10個、あなたが渡すかもしれない」

「もちろん」

ニアは彼らにコインを払い、両方とも旅を続けた

すぐに、彼らは彼らの光景の外にいた彼女は、ポータルを開いた

「帰る時間」

「はい！」

彼らはそれを通り抜けて消えた

※※※

キャンプでチームは驚きを受けた。イテが到着した。

「こんにちは！久しぶり！」イテ叫んだ

「イテ？」キクは驚いた

「はい、キクちゃん、それは私です」イテは言った。「こんにちはカツちゃん、こん

にはスワンちゃん、こんにちはミカちゃん、こんにちはマリーちゃん、こんにちはマ

ミちゃん」

イテはそれぞれを抱きしめた。

「どんな楽しみがありますか？」尋ねたイテ。

「あなたが既に知っている」キクは言った。

「わーい！」

その後、女の子とイテは準備しました。

(Kapitel) 3

PREYHDHRE?Hの島

東アースデイス

W・DR☒SCYLDの包囲から1ヶ月後

ゴーストスクワッドは、安全な家に向かつて静かに進んで、検出されないように注意しました。

通常、高度技術を持つ宇宙に配備された「モバイルユニット1」の最高偵察部隊の1人は、

島を取り戻すのを助けるために、「スクワッド G」がPreyhhdhre?hの島に送られた。

数時間前に、彼らは別の世界で民間人のチームを救助し、人工物を確保していた。

ゴーストスクワッドのメンバーと会ったタジャナ・ラスカは、彼らは破壊された灯台にある安全な家で会いました。

”だから、あなたは増援です?” 頼んだタジャナ

「多分」 Moonwalkerが反応した

「彼女のマナーを許してください。彼女はパンチング中に話す人の一種だ」 Eag

lieは言った、「私が続ける前に、私のチームを紹介しましょう」

「確か！」

「私はEagle、指揮官です。スカウトと車両スペシャリスト、Moonwalker。エンジニアと武器専門家Owl。Wrecker、解体専門家と戦闘スペシャリスト。」Eagleは言った、各メンバーを導入し、「最後に、私たちの医者、Shade。彼女は誰とも通信しませんが、Moonwalker」

互いを紹介して、タジヤナとゴーストスクワッドが作業を議論し始めた。チームが単独でミッションを完了することを決定するのに5分しかかからなかった。